



PASSION

vol.40 OCTOBER 2018

まちをつなぐ、
ところをつくる

巻頭特集

瀬戸内市民図書館 もみわ広場

市民とつくる瀬戸内の未来

～図書館を舞台にした市民参画のとりくみ～

安心と先進で社会文化に貢献する



www.kongo-corp.co.jp

PASSION vol.40
発行元・企画制作：金剛株式会社
2018年10月発行



巻頭言

「平成」が30年間の歴史に幕を下ろそうとしています。
かつて「昭和」が終焉を迎えたときと同様に、社会や個人の意識が大きく変わるターニングポイントになります。
PASSIONで例年取り上げている文化施設や社会教育施設も、
利用者の要望の変化に合わせて多様化し、複合的なものに変わろうとしています。
建物の規模や収容能力などのハード面から、サービスを中心としたソフト面によって評価される時代を経て、
地域コミュニティの「核」として期待される時代の到来です。
また、すでに完成している施設を利用するだけでなく、
運営者と利用者が一緒になって作り上げる施設も増えてきました。

今号のテーマは「まちをつなぐ、ところをつくる」

今回取り上げるのは、まちに関わる「人と人」をつなぎ、まちの「文化と人」をつなぎ、
まちの「過去と未来」をつなぐ施設と職員の皆様です。
つながりから芽生えたまちへの誇りや愛着を糧に、その未来を切り開いていらっしゃる姿はとても頼もしく感じました。
読者の皆様にとって本誌が、縁のあるまちを見直し、もっと好きになっていただくきっかけになれば幸いです。

「安心と先進で社会文化に貢献する」

金剛は永年蓄積してきた保管の技術と先進の知恵で、人と文化を応援します。

このたびは本誌をお手に取っていただき、誠にありがとうございます。

目次

- | | |
|----------------------------------|---------|
| 01. 瀬戸内市民図書館 もみわ広場 (岡山県 瀬戸内市) | p.02-07 |
| 市民とつくる瀬戸内の未来 | |
| 02. 多治見市モザイクタイルミュージアム (岐阜県 多治見市) | p.08-11 |
| 地場産業の再評価で高まる まちへの誇り | |
| 03. 滋賀県立琵琶湖博物館 (滋賀県 草津市) | p.12-15 |
| フィールドから見えてくる共存への道標 | |
| 04. 男木島図書館 (香川県 高松市) | p.16-21 |
| 島初の図書館でコミュニティの継続を目指す | |
| 05. 太田市美術館・図書館 (群馬県 太田市) | p.22-27 |
| 「創造的太田人」育成へのプロローグ | |
| 06. 合志マンガミュージアム (熊本県 合志市) | p.28-31 |
| 第3のマンガミュージアム 地域活性化への挑戦 | |
| 07. 大仙市アーカイブズ (秋田県 大仙市) | p.32-35 |
| 記録と記憶の交差点 | |
| 08. 九州芸文館 (福岡県 筑後市) | p.36-39 |
| 矢部川流域 古代からのメッセージ | |
| 09. 学識者インタビュー | p.40-43 |
| 地域と市民をつなぐ「接点」 | |



市民とつくる瀬戸内の未来
図書館を舞台にした市民参画のとりくみ

interview

瀬戸内市民図書館
もみわ広場

話し手

村上 岳 さん(右)
瀬戸内市民図書館もみわ広場
館長補佐

横山 ひろみ さん(左)
瀬戸内市民図書館もみわ広場
主査(図書館司書)

聞き手

坂井 一隆
金剛株式会社 社長室

※所属・役職は取材当時のものです



01



オリーブの庭
市民が思い思いにゆつ
たりと過ごせる広場
写真撮影/中川正子

瀬戸内市民図書館は、行政と市民による6年間の図書館整備事業を経て平成28年6月にオープンしました。ギャラリーや地域郷土資料スペースなどを併設した多機能型図書館で、オープン後も市民主導のイベントが数多く開催されるなど、絶えず賑わいが創出されています。今回は、それらの具体的な取り組みについて、それぞれの内容や狙いについてお話を伺いました。

—図書館整備事業の始まりを教えてください。

瀬戸内市は平成16年に牛窓町・邑久町・長船町が合併してできた市です。合併前の3つの町の図書館は、とても小さく蔵書数も限られていました。また閲覧をする場所も少なく市民がゆっくり過ごせるような図書館とは言い難く、合併後においても同様の状況でした。

そのような中で、瀬戸内市の図書館を考える「ライブラリーの会」などが設立され「学校司書を配置して欲しい」「公共図書館を充実して欲しい」といった市民の声が行政に届けられるようになりました。その結果、市は図書館の整備を市の重要施策と位置づけ「瀬戸内市新図書館整備検討プロジェクト」を発足したのです。

—整備事業として、最初に幼稚園・保育園への移動図書館に着手されたそうですね。

図書館には全ての市民が来てくださる訳ではなく、利用者もさほど多くありませんでした。特に、小さい子どもがいる方は子どもをつれて頻繁に来館することが難しかったようです。そこで、移動図書館で幼稚園・保育園に出向くことにより、まずは子どもたち自身のために本を借りる体験をしてほしいと思ったのです。当時、移動図書館の担当は2人



市内の中・高生の生徒が企画運営した「としょかん未来ミーティング」(子ども編)

で、本の貸し出しとお話し会を開催していました。1日に多くて3か所、月に数十か所をまわりました。専用の移動図書館車両ではなく一般の軽ワゴン車であったため、出かけるたびに行う本の積み替え作業は肉体的にも大変な業務でした。

また、本を貸し出しする時に「子どもたちが選んだ本なので、お家に持って帰って、必ず一緒に読んでくださいね」と書いた「移動図書館だより」をお渡ししていました。子どもと保護者が一緒に本を読むことによって、本のある暮らしが、いかに豊かなものであるかを実感してもらい、そこから、少しずつ本のある暮らしが市民の中に浸透し、図書館ができた後の暮らしをイメージしてもらえればと思っていました。

—図書館の基本理念を実現するために、どのようにして図書館整備事業を進めていかれたか教えてください。

図書館の基本理念は「もちより・みつけ・わけあう広場」です。普段の生活や仕事で突き当たった疑問や課題を「もちより」、その解決策や展望を「みつけ」、気づきや発見を図書館に集う皆さんで「わけあう」。そんな風に活用していただき、「あそこに行けばなんとかなる」と思ってもらえる図書館を目指しました。静かに本を読むだけでなく、活発な交流のなかから市民の皆さんの夢や願望が実現するような場所でありたいと考えています。

そのような図書館を作るために、市民同士で意見交換を行う「としょかん未来ミーティング」というワークショップを開催しました。図書館をつくるためだけでなく、図書館ができてからの未来のことを考えていこうと思いを込めてネーミングしたものです。このミーティングは、原則的に事前申込制ではなく自由参加制にしました。ミーティングが始まるまで、どんな人が来られるかわからなくて、ドキドキしながらも、誰でもウェルカムという雰囲気を大事にしたかったからです。誰でも参加できるよう敷居を低くすることで、市民の皆さんに広く自分たちの図書館だということを感じていただきたいという狙いもありました。

開催当初は、今ある図書館や博物館をまわって、瀬戸内市の社会教育施設がいったいどうなっているのかを調査したり、有識者から、図書館がいかに市民生活の役にたつかを学んだりしました。ミーティングを重ねるごとに参加層が広がり、市民の意識が変わってきて「こんな建物、こんな部屋がほしい」という具体的な話が出てきました。それと同時

に、市民全体にミーティング内容を知りたいという気持ちが高まってきたみたいです。地元の中高生で企画運営した「子ども編」は、企画運営委員を公募で決定しました。企画運営委員は、自分たちの学校の友達をミーティングに誘ったり、それぞれの学校で新しい図書館にどのようなことを望んでいるのかのアンケートを実施してくれました。結果、実現したものの一例が「チャットルーム」です。おしゃべりしながらホワイトボードに書き込みができる共同学習室がほしい、という意見を反映したものです。その他にも、思い思いにくつろげるようにソファが欲しいとか、トイレは大人用と子ども用の両方があった方がいいとか、子どもたちが一所懸命に考えた具体的な意見を数多く取り入れています。この企画運営委員に参加した当時の中高生たちは今では大学生や社会人となって活躍されています。自分たちの意見が反映された使いやすい図書館が建設されたこと、そしてその立ち上げに関わる事ができたことにとっても大きな誇りをもって話してくれています。

一ギャラリーや郷土資料の展示スペースも併設する多機能型図書館という一面もあると伺いました。詳しく教えていただけますか。

「としょかん未来ミーティング」でも、瀬戸内市のことがわかるような仕掛けが欲しいという要望があり、瀬戸内市の合併の変遷や年表、郷土資料の実物を図書館内の各所に展示した「せとうち発見の道」を作りました。実物の郷土資料を目のあたりにし、関連する書籍や資料を調べることによって、自分たちの住んでいる「まち」について深く学べるようにしたいという狙いがあります。少し古い生活用具などの民俗資料は、



郷土資料とその資料の展示
郷土資料についてすぐ調べることができる



「もみわ祭」のテラス
開館2周年記念イベントを開催



せとうち発見の道
瀬戸内市の「まち」を深く学べるスペース

高齢者が昔を懐かしんで脳を活性化させる「地域回想法」という手法の実践にも活用しています。

また、瀬戸内市出身の世界的な糸操り人形師である竹田喜之助さんの功績を紹介するギャラリーを設置して欲しいという強い要望がありました。これを受けて実物の人形を展示しています。喜之助さんの業績を顕彰しながら、文化の振興と情操教育を図ろうとのことで、市民の実行委員会によって「喜之助フェスティバル」が開催されています。毎年開催される「喜之助フェスティバル」は今年で30回目をむかえ、刺激を受けた市民によるアマチュア劇団の活動も活発になっています。



竹田喜之助ギャラリー
瀬戸内市が誇る国際的な糸操り人形師の人形が展示されている



一実に多彩で数多くのイベントを開催されています。どのように企画運営をされているのですか。

年間80本のイベントをおこなっていますが、何をしようかとアイデアがなくて困ったことはありません。市民によってつくられた図書館友の会「せとうち・もみわフレンズ」や、その他のグループや団体が、図書館に「一緒にやりませんか」と企画を次々に持ち込んでくださり、それが実現しています。「せとうち・もみわフレンズ」と共同で企画した「もみわ祭」は、行政と市民団体が一緒になった協働提案事業です。文化や芸術を学ぶために、子どもたちの合唱グループによるコンサートや、お父さんやおじいさんと一緒に絵本を楽しんでほしいという願いを込めた「読みメンのおはなし会」を開催しました。講演会なども開催し、例えば「まちづくり」の話を聞いて討論しています。他にも、地域ゆかりのアーティストによるトークセッションなども開催しており、市民から「次はあの人を呼びたい」という声が多く上って、毎月恒例になったものもあります。

一ホームページ上に「せとうちデジタルフォトマップ」を掲載されています。市内各地で撮影されたとおきの一枚を市民が投稿し、広く共有するというものですが、このアイデアはどこから生まれたのですか。

以前から、市が持っている情報、実物が出せないもの、古い写真をオープンに利用してもらうために、図書館が主体となってデジタルアーカイブを提供したいと思っていました。また、「変わっていく瀬戸内の姿を写真に残していこう」とする地元のグループからも賛同をいただき、多くの写真を提供していただきました。その他にも、いろんな所からアドバイスを受けながら、市民が自由に写真を投稿・活用できる「せとうちデジタルフォトマップ」ができたのです。その後、市内の名所旧跡や市が収蔵している民俗資料や公文書などの資料をWeb上で見られる「せとうち・ふるさとアーカイブ」というものも作成しています。



「もみわ祭」のオープニング風景
子どもたちの合唱グループによるウェルカムコンサート



せとうちデジタルフォトマップ
郷土の魅力ある風景の写真を提供している
©瀬戸内市

一図書館が主体となって地域のデジタルアーカイブを構築されているのは実に珍しい取り組みですね。一方、本のレイアウトや見出しの付け方など実空間としての図書館づくりの方でも一風変わった取り組みをされているとか。

書架の見出しが特徴的だとよく言われます。棚づくりには、利用者にとって使いやすきたいという職員の間意図を反映していますので、レイアウトの仕方も個性的です。いわゆる十進分類法といった図書館のセオリーを崩すことも認めています。

例えば「母が笑っているのがいちばん」という見出しがついた棚があります。子育て中は、ついイライラしてしまいがちですが、子どもが求めているのは、お母さんの笑顔だと思い、お母さんがホッとできたり、励まされる本をこのコーナーに集めています。見出しは、職員がそこに並んでいる本の背表紙を観察し、そこから得た情報や印象をもとにつけています。必ずしも本のタイトルや分類表示にとらわれないことなく、固い表現にしたり柔

らかい表現にしたり、全体のバランスを見ながら強弱をつけています。



とてもわかりやすい見出し
母に対する子どもの願いが表現されている

一開館から2年。市民との連携にこだわり続けてきたわけですが、振り返ってみていかがですか。

市直営の図書館であるため、市民と連携をしやすく柔軟性があるのではないかと感じています。また、3年後、5年後の近い未来だけではなく、今いる子どもたちが大きくなった時の「将来の瀬戸内」のビジョンを長い目でみながら図書館の運営を心がけています。1日1日、この図書館が瀬戸内市民の図書館になっていくようにと思いが



ら仕事をしています。利用者や貸出も増えてきており、やりがいを感じています。

一行政と市民がいっしょになって、意見を出し合いながら整備計画を推し進め、誰もが訪れたい図書館をつくられました。この協働作業は、図書館がオープンしても、一貫して継続されており「将来のまち」に向かって確実に進化していると確信しました。

本日は貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございました。
(取材日：2018年6月29日)

もみわカフェ
明るく開放された空間で、ちょっとしたおしゃべりができる




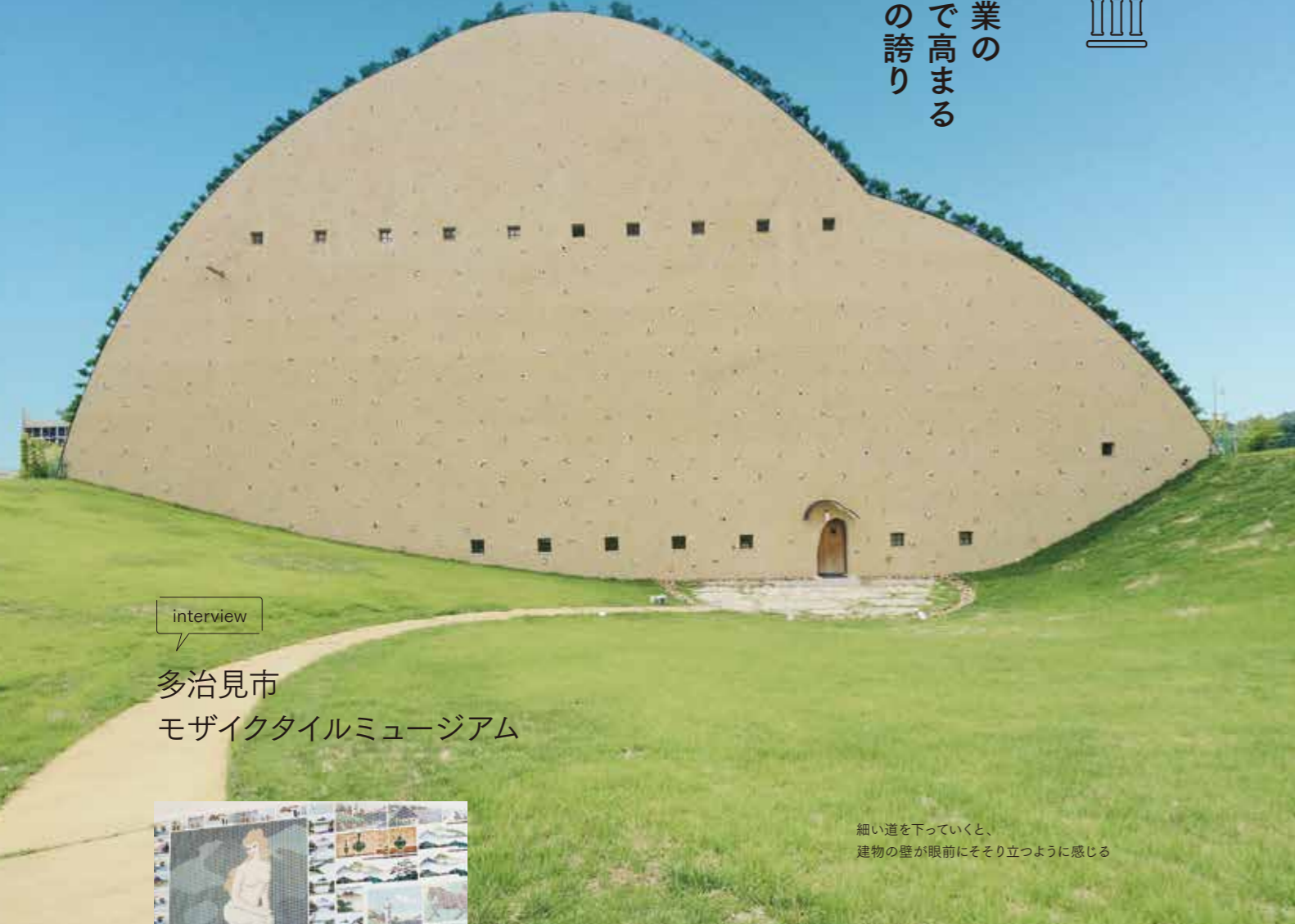
瀬戸内市民図書館 もみわ広場

所在地 岡山県瀬戸内市邑久町尾張465-1
TEL 0869-24-8900
開館時間 火・水・土・日・祝日 …午前10時～午後6時
木・金 …午前10時～午後7時
休館日 月曜日(ハッピーマンデーを含む)
祝日(ハッピーマンデーを除く)の直後の平日
毎月最終水曜日(祝日のときは前週の水曜日)
年末年始、特別整理期間
URL <https://lib.city.setouchi.lg.jp/>



瀬戸内市民図書館もみわ広場のオリジナルグッズ

02

 地場産業の
 再評価で高まる
 まちへの誇り



interview

多治見市
 モザイクタイルミュージアム



細い道を下っていくと、
 建物の壁が眼前にそそり立つように感じる



話し手

かがみ
各務 寛治 さん(右)
 多治見市モザイクタイルミュージアム 館長
 一般財団法人たじみ・笠原タイル館 代表理事
 株式会社ヤマセ 取締役会長

村山 閑 さん(左)
 多治見市モザイクタイルミュージアム
 展示事業グループ

聞き手

宮脇 薫子
 金剛株式会社 復興推進本部 戦略室

※所属・役職は取材当時のものです



4F 展示室の内部

私たちの暮らしを彩るモザイクタイル。その最大の生産地である岐阜県多治見市笠原町に、タイルの魅力発信するミュージアムがあります。構想期間は20年以上。地元タイル業界協力の元、平成28年にオープンしました。

開館をきっかけに、タイル、そしてタイル産業を再評価する動きが進む中、ミュージアムを地元の方々の「まちへの誇りを象徴する存在」にしたい。そう語るのは、タイル原料メーカーを経営しながら開館に尽力した各務館長と学芸員の村山さん。お二人にミュージアムの運営に込める想いを伺いました。

—多治見市笠原町はモザイクタイルの生産量・シェア共に日本一を誇るのですよね。

村山 モザイクタイルとは、一枚の表面積が50cm²以下の小型タイルを指します。笠原町は多治見市と合併する以前から、人口一万人ほどの小さな町ながら最盛期では100を超えるタイル工場が存在し、現在も原料メーカー・タイルメーカー・商社・施工業など様々な分業体制の中、まち全体でタイルを生産しています。

多治見市モザイクタイルミュージアムは、平成28年6月に旧笠原町役場の敷地跡に開館し、生産地であることを生かしてタイルの魅力発信しています。運営する一般財団法人たじみ・笠原タイル館は、タイル業界の有志が立ち上げた財団法人です。

オープン以前は年間2万5千人の来館者を見込んでいましたが、その予想を大幅に超えて最初のひと月で1万人、開館2年目

の現在は累計入館者が30万人を突破しています。これは、開館以前から藤森照信氏*1による設計が建築ファンの間で注目されたり、来館者が撮影したタイルの写真がSNSで拡散されて話題になったおかげだと考えています。

—館内に並ぶ数々のタイルコレクションは、各務館長を中心とする地元タイル業界の有志が収集されたと同っています。

各務 平成5年頃から数人の同業者に声をかけて、仕事が休みの日など時間を見つけては廃棄されそうなタイルを集めはじめました。20数年かけて集めた点数は大小合わせて約1万点にも上ります。まずは地元で収集活動を始め、声がかかれば全国各地へ足を運び、運搬費用を自己負担して持ち帰りました。例えば当館の3階に展示している東京大学の先端科学技術研究センター*2に使用されていたタイルも解体現場で収集したものです。



貼り板
 モザイクタイルの出荷前の仕上げ加工である紙貼り作業は、今もこの貼り板を使う



4F展示室にある「作品」の一つ
 床屋さんのカウンター



様々なモザイクタイル画や絵タイルを貼り混ぜた画面構成
 タイルならではの一体感



1Fショップで販売している詰め放題のアンティーク調タイル

※1 日本の建築史家、建築家
 自然素材や植物を取り入れた、従来の常識を超えるユニークな作品が世界的に評価されている

※2 旧東京帝国大学航空研究所 2号館



タイルカーテン
藤森照信氏のアイデアで作られたタイルの新しい見せ方
制作の一部には笠原町の住民や関係者も携わった

―集め始めたきっかけは何だったのですか？

各務 多治見市を含む東濃地域は陶器の名産地です。ですから、当時すでに周辺の市町村には陶芸家やアーティストの焼いた「作品」を飾る美術館がありました。しかし東濃地域の産業を支えたもの、つまり私たちの暮らしを支えたのは、各地域で生産されていた盃や茶わんのような「一般の食器」であり、笠原町にとっては「タイル」です。ですから「作品」でなくても、それらこそ評価されるべきではないか、と疑問を抱いていました。

タイルは建築に用いる建材です。建物を解体する際にはタイルごと産業廃棄物として捨てられてしまいます。そのような認識ですから、生産者も在庫が多く残ったときはタイルを処分しているような状況でした。

タイルの収集を決意した平成5年頃は、バブル崩壊の影響が徐々に始まり、タイルの生産量が年々落ちていっている頃でした。かつて笠原町のタイル産業は戦後の復興と相まって隆盛を極め、昭和30～40年後半にかけては、名古屋港の主要輸出品目として世界中に輸出されていきました。

タイルの収集を続ける我々に対して、地元の人々から「そんなもん集めてどうするの?」という意見があったのも

事実です。彼らにとってタイルは掃いて捨てるほどあるような存在でした。身近であるがゆえにタイルに対する特別な感情がなかったのだと思います。ですが、自分のまちに対して、仕事に対して、誇りを持たないとダメだと思うのです。誇りがなくて、いい仕事ができますか？

このままタイル産業が衰退して、地元の歴史に「笠原町はかつてタイルを作っていました」と、たった一行が刻まれて終わるようなことは絶対に嫌でした。万が一、産業が消えたとしても実物が残っていれば、100年、150年先の人たちがタイルに価値を見出して、またここ笠原町でタイル産業が興るかもしれないとも考えました。だから、残さんといかん。今ならまだ遅くない。そのような危機感と決意が収集活動のきっかけだったと言えます。

―タイル産業を守るために実物をアーカイブしつつ、何よりも地元の方々にタイル産業への誇りを持ってほしいという館長の想いをひしひしと感じます。

村山 ミュージアムの2階は産業振興フロアとして、地元タイル業者の製品を来館者が実際に手に取ることができるつくりになっています。タイル業界のOBである「コンシェルジュ」やインテリアデザイナーの先生にタイル選びや施工に関する相談をしたり、直接商談してタイルを購入することもできます。

実はこのフロアの設置を熱望したのはタイル商社でした。自社のショールームを持たない小さな商社はハウスメーカーや工務店などに売り込む営業スタイルです。同じような色やデザインの「無難な」タイルばかりが採用される現状を前に、エンドユーザーにもっと多様な種類のタイルを直接届けたいと考えていたのです。今まで商社に売る立場だったメーカーもエンドユーザーに接する場ができましたので、試



2F 産業振興フロア
実物のタイルが貼られたパネルやタイルメーカーのカタログを設置



昭和30年頃のタイル見本台帳
同じ形でも並べ方や色の組み合わせ次第で多様な表現ができるのがモザイクタイルの魅力



ミュージアム周辺にあるゴミステーション
地元の女性グループやタイルメーカーなどが制作した約20箇所、すべて違うデザインなもの見どころ
モザイクタイルを再評価する動きが地元にも広がっている

作品を置いて来館者にアンケートを取るなど、新しい試みが始まっています。このフロアが活性化することで、ミュージアムがタイル業界の販路の拡大や新商品の開発に貢献できれば嬉しいですね。

―常設展示とは別に、年3回の特別展に合わせたイベントも盛んにおこなわれていますね。

村山 周辺地域と連携しながら、ミュージアムの中にとどまらず、まちに飛び出すようなイベントを企画しています。例えば、タイルに興味を持ってもらう狙いで企画した、まちの中のタイルを探す「まち歩き」イベントは好評でしたので今後も行うつもりです。また、タイル製造にまつわる工場見学会も重視しています。分業体制でタイルを生産するこの地域では、各工場がそれぞれの複雑な工程を精密にこなすことで、質の高いタイルができあがります。よく「タイルって高いんでしょ?」という声を耳にしますが、工場を見学してタイル製造が生易しいものでないと分かったら、値段が高い理由を理解していただけます。一時、タイルは外装用のものが大量生産されるようになり価格競争に陥りました。適正価格を維持す

るためには、多くの方にタイルの価値と魅力に気が付いてもらい、実際に使ってもらわなければなりません。そのためにもタイルに対する認識が変わるような、当館ならではのイベントを随時企画していきたいですね。

遠方からも多くの方がいらっしゃるものの、ミュージアムの周辺部はタイル生産エリアだったのでレストランなどのお店がほとんどありません。最近、タイル業者が運営するカフェや雑貨屋さんもオープンしましたが、これからもっとお客様を迎え入れる体制にまちが変わっていくといいですね。地元の人々が、この地域がタイル産業で成り立っていることを今一度実感し、自分たちでも案内したい「誇れるまち」になるように、当館からタイル産業へ、そしてまち全体へ活気と賑わいを還元できればいいなと思います。

―地元の方々の「まちへの誇り」を育み、多くの方にタイルの魅力を発信するために、地元産業界の想いが詰まったこのミュージアムを持つ大きな可能性を感じました。今日は貴重なお話をありがとうございました。

(取材日:2018年7月12日)



特別展「工場賛歌-釉薬編(2017年8月26日~11月26日)」関連イベントの様子
釉薬を製造する工場の社長自らタイルの色彩について語り、工場案内も行った

多治見市モザイクタイルミュージアム

所在地 岐阜県多治見市笠原町2082-5
TEL 0572-43-5101
FAX 0572-43-5114
開館時間 9:00~17:00(入館は閉館の30分前まで)
休館日 火曜日(休日の場合は翌平日)
※年末年始12/29~1/3の間休館となります
URL <http://www.mosaic-tile-museum.jp/>



interview

滋賀県立
琵琶湖博物館フィールドから見えてくる
共存への道標

03

フィールドで調査する学芸員の様子を
パネルで再現

話し手

大塚 泰介 さん

滋賀県立琵琶湖博物館 総括学芸員
博士(農学)

聞き手

三木 すずか

金剛株式会社 社長室

※所属・役職は取材当時のものです

滋賀県面積の約6分の1を占めている琵琶湖。湖水は、水道用水や工業用水、農業用水として、滋賀県のみならず京都府・大阪府・兵庫県でも利用されています。また琵琶湖漁業も盛んに行われ、コアユやビワマスといった湖魚を使った独自の食文化も存在します。

琵琶湖は古くから滋賀県内外の人々の暮らしを支える一方で、土地開発や産業発展など人間の事情によって進む水質汚濁が問題視されてきました。

「人間が湖と共存していくために、何をするのが正解か?」。その答えを探るため、滋賀県立琵琶湖博物館の総括学芸員の大塚さんに、琵琶湖博物館が行っている利用者主体の事業についてお話を伺いました。

—滋賀県立琵琶湖博物館の特徴について教えてください。

琵琶湖博物館は「湖と人間のよりよい共存関係を築くこと」を目的として設立された博物館です。この目的を成し遂げるために、①テーマをもった博物館②フィールドへの誘いとなる博物館③交流の場としての博物館、という三つの基本理念があります。①のテーマとは「湖と人間」です。②のフィールドというのは、琵琶湖周辺の様々な地域を指します。③は、いろいろな人と情報の交流の中から知恵を生み出していくことを意味しています。この三つの基本理念を土台にして、テーマに沿った情報を集積し、展示に反映させ、さらにはフィールドへ誘う入り口として機能する博物館を目指しています。そしてなにより、博物館側が一方的に知識を発信するのではなく、いろいろな人がフィールドから得た情報を集めて、共に考え、発信していく。そういう情報の流れが大切だと考えています。そのため当館では様々な事業を通して地域の人々に、研究を含む博物館活動に深く関わっていた

—具体的にどのような事業を行っていますか?

例として「はしかけ制度」があります。当館の理念の下、共に博物館を創りあげていこうとする人たちが集まり、グループに分かれて博物館内外で様々な活動を展開していくというものです。

また「フィールドレポーター」の活動では、滋賀県の自然や人の暮らしなどを調査しながら、そこで得た情報を博物館の展示や研究活動に活かしています。フィールドレポーターも博物館が提示した枠組みの中とはいえ、利用者が自ら研



利用者と共に考え、発信していくことを意識した情報が多く展示されている



究を行っているのです。

学芸員だけではない様々な人が研究することで、より豊かな成果が得られるのではないかと、私たちは考えています。

—どちらの制度も会員数がとても多いそうですね。

はしかけ制度が約350人、フィールドレポーターが約200人います。※1

先程から「自ら研究」などとハードルの高そうなことを言っていますが、



はしかけ制度やフィールドレポーターが発信している「地域の人々による展示コーナー」



リニューアルで新設された展示室「おとなのディスカバリー」では学芸員による「ビワコオナマズ」の解説が行われていた

※1 2018年8月現在



はしかけ制度に関しては、実は結構ゆるい制度です。館の設置目的である「湖と人間のよりよい共存関係を築くこと」に沿った活動をする、ボランティア保険に加入すること、担当学芸員をつけてグループで活動すること。これらのゆるい制約条件の中であれば、どんな活動をして構いません。その結果、多くの方に参加していただいているのではないかと思います。それぞれのグループの活動内容は様々で、現在は24のグループがあります。



はしかけ制度の登録者も参加する研究会で作成した「TNB48」と名付けられた田んぼのコーナーの展示

一具体的にはどのようなグループがあるのですか？

全ては紹介しきれませんが、例えば、県内の魚を採集して調査するグループ、化石を発掘するグループ、小さな子どもと親御さんを対象にした環境学習の基礎を学ぶグループなどがあります。また、スケッチと俳句を専門にしているグループもあります。俳句は専門の学芸員がいないので指導ができませんが、たまたま館長に俳句の趣味がありましたので、館長がバックアップして活動をしています。

先ほどから研究の話が多くしていますが、全てのはしかけ制度の登録者が研究目的で参加しているわけではありません。また、研究志向で来る人たちは、ある程度研究の素養がある人が多いですが、本来の専門分野は全く異なることもあります。金属工学のエンジニアだった人が、引退後70歳で珪藻けいそうの研究を始め、80歳までに何本も論文を書いたという例もあります。

ですが、魚が好きな人は魚を調査するグループに参加しますし、絵を描くのが好きな人はスケッチをするグループに参加します。参加の動機は至って単純で、参加者が興味のある活動に参加しているだけなのです。

一参加者を集める際にはどのような呼びかけを行ったのですか？

そんなにおおげさな広報はやっていません。当館のWebサイトに事業の紹介を掲載し、ときどき活動成果を県が資料提供しているくらいです。それでも年に三回行われる登録講座に、毎年新規の方が合計で50人ほどいらっしゃいます。参加のきっかけの中には、口コミの影響もあると思います。はしかけ制度は一年ごとの更新なのですが、ある程度のお出入りがありながらも、毎年300人台で落ち着いています。

広報や口コミ以外のきっかけで参加する場合があります。学校の部活の枠を飛び出して参加するパターンです。最近できた「琵琶湖梁山泊」というグループがそうです。滋賀県内の高等学校の生徒たちが研究を進めるうちに、先生方が指導できるレベルを超えたことを始めてしまったために、専門家の指導を求めて博物館に来たのが発足のきっかけでした。現在このグループには、他にも自由研究が高度になってしまったために、近くでアドバイスを受けにくくなったという問題を抱える中学・高校生たちが集まっています。高いレベルで研究をしている生徒同士が交流することで、互いに刺激を受け高め合えますよね。そうい

う関係づくりのできるグループになってほしいと思っています。

一最後に、琵琶湖博物館は滋賀県民の人たちにとってどういう場所でありたいか、お聞かせください。

琵琶湖博物館は、滋賀県民自身が滋賀の環境を考えていけるような場所をつくらうということで設立されました。琵琶湖の環境は人間の生活とともに変化し、生活排水、工業排水、農業排水など、いずれにせよ人間の事情で水質が汚染されました。そこで、琵琶湖の環境を回復させるために、「石けん運動」^{※2}などの環境保全の活動を、多くの滋賀



滋賀県立琵琶湖博物館

所在地 滋賀県草津市下物町1091
TEL 077-568-4811
開館時間 9:30~17:00(最終入館 16:30)
休館日 毎週月曜日(休日の場合は開館)、
その他臨時休館あり
URL <http://www.biwahaku.jp/>



※2 1970年代後半、琵琶湖の淡水赤潮の発生を機に、主婦層を中心に合成洗剤の使用をやめて粉石けんを使おうという運動、いわゆる「石けん運動」が県内全域で展開された。(滋賀県ホームページより)

県民が行ってきました。一方で、開発や外来生物などの影響で生態系が変化したために、水質が改善されたにもかかわらず、本来の環境に適応していた生き物が戻って来ないなど、別の問題も出てきているのが現状です。人間と琵琶湖が共存するために、次に起こすアクションが本当に正しいのかどうかを見極めるのに必要な情報を集め、皆で一緒に考えていくことが、今とても大切になっています。

そのためにも、まずは当館にいる学芸員たちの専門知識を活かして、時代による琵琶湖の環境変化の情報を、できるだけ多く蓄積し伝えられるような場所にする必要があります。



展示室を抜けた通路の壁にはフィールドへ誘う言葉が目に入る

す。それに留まらず、フィールドに生きる人たちの声に耳を傾けて情報を頂き、琵琶湖と共存するためにはどうしたらよいかをみんなで一緒に考えていく。琵琶湖博物館はそんな場所でありたいと思っています。

一滋賀県というフィールドに生きる人々と学芸員と一緒に情報を集めて交流することで、県民が琵琶湖と共存していくための道標が見えてくるのです。今日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございます。

(取材日:2018年7月19日)

04



島初の図書館で
コミュニティの
継続を目指す

report

おぎじま
男木島図書館

話し手

額賀(福井) 順子 さん
特定非営利活動法人
男木島図書館 理事長

聞き手

三木 すずか
金剛株式会社 社長室

※所属・役職は取材当時のものです



瀬戸内海に浮かぶ
アートな島々

瀬戸内海に浮かぶ島々は、近年瀬戸内国際芸術祭などアートに関する取り組みが盛んに行われている注目の地域だ。

平成28年2月、その内の一つである香川県高松市の男木島に図書館が設立された。名前は「男木島図書館」。島にとって初めての図書館となる。設立資金の一部はクラウドファンディングで調達。世界中から多くの賛同と支援が集まった注

目の図書館だ。空き家をリノベーションしてできた木造の図書館は周りの住居と馴染み、ずっと前からそこにあったかのようにも感じさせてくれる。

この図書館の設立を筆頭になって実現させたのは、特定非営利活動法人男木島図書館の理事長である額賀順子さん。額賀さんを訪ね、この島に突然図書館が建てられた理由を探った。



高松港と女木島・男木島を結ぶフェリー「めおん2」

移住者がつくった 島初の図書館

額賀さんは福島県出身。大阪で結婚し、ウェブデザイナーとして働いていた。平成25年の瀬戸内国際芸術祭が行われた際、男木島出身の夫が男木島の観光用Webサイトをつくる仕事を受けたことをきっかけに、家族で男木島に移住することになった。

額賀さん夫妻がまず行ったのは、市に休校になった学校を再開してもらう運動だった。「大阪で生活しながら休校だった学校を再開してもらうのはとても大変なことでした。様々な働きかけの末、学校が再開することになり子どもが学校に通えるような準備が整ったんですけれど、これで終わりではないという想いが自分の中でありました。そこに入ったうちの子どもたちが卒業して、また学校が休校になってしまうのでは意味がないと思ったんです。」と額賀さんは語る。

移住にあたり学校の存続だけではなく、島の子どもたちが室内で学べる場所や、移住者と島の人と

の交流拠点など、島のコミュニティについても考えるようになったそうだ。島のコミュニティの継続のために、自分ができることはなんだろうと考えた時に「それができるのは図書館なのかな」と額賀さんは思ったという。

オンパによる 移動図書館の開始

図書館の設立が決まり、島内で見つけた物件を図書館として改装する間に行ったのが、オンパ(手押し車)による移動図書館だった。道が狭く車での荷物の持ち運びが難しい男木島では、オンパがよく使用され島の人にとっては馴染みのあるものだ。

移動図書館には、もともと本好きな額賀さんが所有していた本を毎



カウンターに置かれた黒板には図書館の利用案内が書かれている



最大で200冊は運べるという移動図書館で使用していたオンパ

回70冊ほど持ち運んだ。週に一回、港にある男木島交流館で移動図書館を行い、そこにいる人たちに本を貸し出した。「移動図書館を始めたタイミングでは、ある程度の島の人たちは私が図書館をつくろうとしていることは知っていました。しかし、今まで島に図書館が無かったということもあり、具体的に私が何をしようとしているのかを理解している人は少なかったと思います。オンパを持って行っても『どうすればいい?』『お金は払わなくてもいいの?』ということを聞かれたりもしました。」と額賀さん。図書館の仕組みに馴染みがある人もそうでない人もいる中で、額賀さんはその場で説明を行い、島の人々に「男木島図書館」への理解を徐々に深めてもらった。

オンパで移動図書館を行っていた頃の、小さな島ならではのエピソードもお聞きすることができた。



©男木島図書館

ちゃぶ台がある2Fの閲覧スペース



2Fの小窓からは瀬戸内海が臨める

「当初は島の中だけの貸し出しだったため、図書カードではなく、スマートフォンのカメラで貸した本と借りた人の顔の写真を撮って記録していました。せまい島なので、皆さんの顔も住んでいる所も知っています。このやり方が正しいかはわかりませんが、男木島だからこそできたことだと思います。」現在は記入式のカードで図書を管理しているそうだ。

島に馴染みのあるオンパを利用した移動図書館や、カメラで撮影して図書の利用を記録するなど、その土地ならではの手法に男木島の個性を感じることができた。

強い意志とそれに続く人々

リノベーションの際、多くのボランティアが集まった。島内は勿論のこと、島外からも多くの人が集まったという。ボランティアをどのようにして集めたのかを額賀さんにお聞きすると、「自然に集まった」そうだ。「ボランティアといっても、こちらからお願いをして集めたわけではありません。屋間に私たちが空き家の改修作業をしていると『そんなんじゃいつまでたってもでき上がらんぞ!』と、見かねた島の人々が手伝ってくれるケースが多くありました。屋根の瓦を運んだりといった人手の必要な作業の際には声をかけてお願いをしました。それ以外は自然に島の皆さんが集まってくれました。」改修作業時の現場のアットホームな雰囲気をイメージできる。

島外からのボランティアについても、当初はそんなに多くの人



©男木島図書館

を集めるつもりはなかったそうだ。「手伝いたいけどいつ作業しているか分からない」という声が多く寄せられたため、できるだけオープンに活動を行おうと同館のWebサイトやSNSでボランティアを募った。それが、ボランティアが多く集まったきっかけとなったという。中には、東京や海外から来られた方もいたそうだ。

図書館を設立する活動の中で、一貫して感じられるのが「できるだけ自分の力で」行おうとする額賀さんの強い責任感だ。もちろん様々な人からの協力があったからこそ、今の図書館が存在している。しかし、額賀さんの強い責任感や決意を感じなければ、こんなにも多くの『協力』は集まらなかったのではないだろうか。クラウドファンディングで募った資金についても、最初からそれに

頼っていたわけではない。額賀さんが用意していた資金を運用していく中で、どうしても不足してしまった部分をクラウドファンディングで補ったという形だ。図書館を設立するという活動を通じて、たくさんの人たちが額賀さんの強い意志を感じたのではないと思う。



©男木島図書館

改修作業の様子



©男木島図書館

男木島の「継続」の形

同館はリノベーションする際にボランティアの設計士と話をし、島の景観を壊さないことに気がつけた。素材についてもできるだけ島のものを使うことを意識し、追加して入れた柱は、取り壊した倉庫の廃材を使用した。内装は、建て替えとなった学校の廃棄処分されるはずだったものが多く取り入れられている。机や椅子、窓、大きいものからちょっとしたものまで、至る所で学校の懐かしい雰囲気を感じることができる。「図書館の役割として、地域のアーカイブというものがあると思っています。なので、できるだけ地域の本を置いて



男木島の学校で使用されていた校長室の椅子

いきたいと思っていますし、かつて島の学校で使われていたものなどを残すことで、当館に来た人たちがその息吹を感じることができたらいいなと思います。」と額賀さんは語る。こういった考えは、実は当初からのものではない。建物を改築するまでや実際に運営をしていく中で、男木島という場所にはどのやり方が一番合うのか、いろいろな方法を試しながらようやくフィットする形を見つけられたという。

今後の展望についてお聞きすると、額賀さんは「継続です」とはっきりと答えてくれた。「どのように継続していくかが重要だと思っています。最初のスタートアップは勢いで結構いけちゃうんですよ。でも継続するという地味なことを、何年できるかが大事だと思っています。男木島図書館がどんな場所であるのか、成果としてちゃんと見えるようになるのは10年後だと思のです。」図書館をつくるのが本来の目的ではないということを額賀さんは忘れていない。最初は自分の子どものために学校を

再開することから始まった額賀さんの島での活動。それがいつの間にか「島の継続のために」という思いから、島の人々にとって欠かせない場所を作り上げようとしている。

男木島の図書館にとって、継続性のある運営とはどんな形なのだろうか？そのよりよい形を求めて、男木島図書館は島と共に育ち変化していくだろう。

(取材日：2018年8月2日)



男木島図書館

所在地 香川県高松市男木町148-1
開館時間 基本 金・土・日・月 11:00~17:00
URL <https://ogijima-library.or.jp/>





05



「創造的太田人」育成への
プロローグ

report

太田市美術館・図書館

話し手

富岡 義雅 さん (右)
太田市美術館・図書館 館長補佐

星野 真也 さん (左)
太田市美術館・図書館

聞き手

三木 すすか
金剛株式会社 社長室

※所属・役職は取材当時のものです



太田の知と感性の
プラットフォーム

太田市美術館・図書館は、平成29年4月に群馬県太田市に開館した複合施設だ。まちに創造性をもたらす知と感性のプラットフォームとして「そうぞうてきおたびと創造的太田人」を基本理念に掲げている。さらに、太田市で育まれたものづくりの英知を継承しながら、市民によるまちづくりの拠点となることを目指している。

今回、同館に勤務している富岡さんと星野さんにお話を伺った。

©Daichi Ano

「空き地に“的なもの”ができるまで

「駅前に賑わいを取り戻したい」という思いから、プロジェクトが始まった太田市美術館・図書館。当初は、現在のような複合施設を建設する予定ではなかったという。当初市が計画していたのは、コミュニティの場となるような小さなギャラリーやカフェだった。それが今の形に至ったのは、市民の意見が反映されたからだ。

基本方針の策定において、市民の意見を取り入れたよりよいものにしてという観点から、市内の図書館を利用して市民アンケートを実施した。そこで持ち上がったのが「親子で一緒に過ごせる場所がほしい」という子育て中の方々の意見。市のプロジェクトメンバーは、絵本や児童書を多く置いた施設であれば、より多くの方々に施設を利用してもら

えるのではないかと考えた。

「ギャラリー“的なもの”と、児童書を中心に置いた図書館“的なもの”。その二つに加え、人が集まりやすいカフェを併設することになりました」と富岡さんは語る。図書館というよりも、敷居の低い文化施設をつくるイメージで基本方針を完成させたそうだ。富岡さんのいう“的なもの”という表現からは、市民が身構えずに入りやすい、自由で気兼ねない場所を提供したいという気持ちが感じられた。

市民の意見を反映させたのは、基本方針だけではない。建築設計段階では、設計事務所と市民によるワークショップを行った。このような試みは、太田市では初めてのことだった。

この試みの象徴ともいえるのが、美術館と図書館がからみ合うようなゾーニング*1だ。当初のプランでは、美術館と図書館は区分されていたという。しかし、ワークショップを

行う中で「美術館と図書館は分かれていなくてもいいよね」「一緒になってごちゃまぜになっているほうが楽しいよね」という市民の意見があり、現在の形に至ったそうだ。

通常は設計事務所だけを行うことを、市民と一緒に行うのは簡単なことではない。しかし、市民の突飛でユニークな意見が、利用者にとって過ごしていて楽しい空間に繋がっている。



ワークショップの様子
ワークショップ参加者は30~60代の方が多かったが、前橋工科大学の建築学科の学生がボランティアとして加わったこともあり、かなり活気のあるものとなった



「太田市民」のための施設

同館の特徴は個性的な設計やゾーニングだけではない。館内には、世界60カ国以上から集めた12,000冊を超える絵本と児童書、そして9,000冊のアートブックが揃っている。

中でも絵本と児童書は、国際アンデルセン賞受賞作をはじめとした貴重な洋書を世界中から取り寄せている。各国の文化がにじみ出た個性豊かな本の数々は、世界の多様性に触れる入口であり、同図書館最大の特色でもある。

外国の絵本は日本のものに比べて色合いがかなり鮮やかだ。言葉を見なくても絵を見れば内容がわかるような、子どもが楽しめるものが

沢山ある。また、世界の絵本や児童書を多く置くことで、学校の図書館とは違った過ごし方ができるのではないかと同館は考える。

世界中の絵本を取り寄せているもう一つの理由として、太田市に多くの外国人が住んでいるというのが挙げられる。太田市は自動車産業のまちで、下請け産業の裾野が広い。工場の働き手として、外国から太田市にやって来ているのだ。そのような市民にも、日本人と同じように施設を利用してもらいたいという思いが込められている。

出身地や人種という垣根を越え、全ての市民が施設を利用することにより、まちに創造性をもたらすのだということを同館が体現してくれた気がする。



世界の絵本・児童書のコーナー
背表紙には国旗のシールが貼ってある



*1 ゾーニング…都市計画や建築プランなどで、空間を用途別に分けて配置すること。
松村明編(2006)『大辞林 第三版』三省堂

ボーダーレスな取り組みで まちを再発見

まちづくりの拠点を目指す同館では、まちに徹底的に開かれた地域と繋がる施設を意識し、市民と連携した取り組みを多く行っている。

美術館で行われている「フォトスケッチ」は、写真撮影を通して太田のまちを新たな視点で再発見することを目指した写真展だ。太田市にまつわる市民からの公募写真とプロの写真家を展示している。平成30年6月20日から第3回目となる「フォトスケッチ」を開催。また、7月7日には参加者でまちに出て写真を撮影する市街地ツアーを初めて行った。一人では気付かなかったものを、複数人だと気付く場合もある。そのようなまちの隠れた魅力を、参加した人々が共有できるツアーとなっている。

また、図書館では「まちじゅう図書館」を実施。市内の商店や事務所・個人のお宅を、市内に点在する

小さな図書館、そこにある本を図書館の蔵書と見立てて、まちじゅうを図書館にしてみようという試み。普段は利用者側である市民が、館長となって図書館を運営する。今年度は新たにスタンプラリーを開催。定期的に参加館で集まって会議を行ったりと、活発に活動を行っている。

これらの活動を通して、参加者だけではなく職員自身も初めて知った場所があったという。市民と直接事業に関わることで、職員も一太田市民として自分のまちの魅力を“再発見”しているのだ。

また、イベント情報はネットでも発信している。「ホームページの他にもSNSでの投稿や、動画サイトにワークショップの様子を配信するなどしています」と星野さん。館を利用したことが無い方や、館の周辺に住んでいない方にも活動を知ってもらい、参加してもらえるように工夫を怠らない。

押し付けない育て方

同館の基本理念である「創造的太田人」。市民を創造的太田人に育てるためには「押しつけをしてはいけない」と富岡さんは強調する。

「私たちが子どもの頃は当館のような複合施設はありませんでした。しかし、今の子どもたちは多くの価値を一度に共有できる場所に来て、様々な体験ができます。それは子どもたちにとって、有意義なことではないでしょうか。ここでの体験が、子どもの成長過程で、“創造性”を持つ一つのきっかけになればいいと思います。そし



フォトスケッチ
展示室の中だけでなく、通路にも市民による
公募写真が丁寧に並べられている

て、当館に来れば今まで知らなかった面白いものに出会えるということ、子どもだけではなく、市民一人一人に少しずつ受け止めていただければいいと思います。」

太田市の人々にとってこの施設は、まちの良さを改めて気付かせてくれる存在でありながらも、新しい知識の扉を開くのを手伝ってくれる魅力的なスポットだ。今は日常に埋もれて気付かなくても、ここを利用する太田市民が「わたしを育てたのは太田市美術館・図書館だ」と胸を張って言う日はそう遠くないだろう。
(取材日：2018年6月20日)



エーアイラボオタによる家具
館内にはメイドイン太田による、ものづくりが至るところに施されている
例えば、幾何学的なソファや室内に浮かぶようなランプシェード
これらは太田市のものづくり集団である「株式会社エーアイラボオタ」によるもの



太田市美術館・図書館

所在地 群馬県太田市東本町16番地30
TEL 0276-55-3036
開館時間 午前10時～午後8時(日曜・祝日は午後6時まで)
※企画展の観覧は午後6時まで(入場は午後5時30分まで)
休館日 月曜日(祝日・振替休日の場合は翌日)
年末年始(12月29日から翌年1月3日まで)
※毎月最終火曜日は、図書館エリアのみ休館
URL <http://www.artmuseumlibraryota.jp/>



入口にまちじゅう図書館のフラッグを掲げ、参加館であることをアピール

第3のマンガミュージアム 地域活性化への挑戦



interview

合志マンガミュージアム

話し手

橋本 博 さん

合志マンガミュージアム 館長
NPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクト 代表

聞き手

宮脇 薫子

金剛株式会社 復興推進本部 戦略室

※所属・役職は取材当時のものです



06



県産材で作られた立方体が並ぶ空間で、くつろぎながら約1万5千冊のマンガが読める施設。それが、平成29年7月にオープンした合志マンガミュージアムです。バックヤードには約4万冊のマンガが保管されています。

「地域密着型のマンガミュージアム」として注目される同館。かつてマンガ専門の古書店を営んでいた橋本館長に、マンガの力を使った地域活性化への挑戦についてお話を伺いました。

一国内にある80館以上のマンガ関連施設と比べた際に、合志マンガミュージアムはどのような位置づけだとお考えですか？

私は合志マンガミュージアムを「第3のマンガミュージアム」だと考えています。「第1のマンガミュージアム」は、宝塚市立手塚治虫記念館(兵庫県宝塚市)や石ノ森萬画館(宮城県石巻市)のようにマンガ家個人を顕彰する施設で、「第2のマンガミュージアム」は京都国際マンガミュージアム(京都府京都市)をはじめとする、都市部にある大規模なマンガミュージアムを指します。当館はそのどちらにも属さない、地方都市にある小規模で地域密着型のマンガミュージアムです。幅広いマンガを扱いながらアーカイブ機能も兼ね備えています。

一地域密着型のミュージアムということですが、オープン後、周辺にお住まいの方々の反応はいかがでしたか？

ミュージアムがある合志市はベッドタウンですから、行政は地域を観光で活性化することは難しいと考えていたようです。しかし当館ができたことで一気に知名度が上がり、フリガナがなくても「合志」を「こうし」と読むことができる方が増えてきたみたいですね。地元住民の中には「遠方に住む親戚に『合志市ってマンガミュージアムがあるすごいところなんだってね!』と言われたんです!」と喜んでいる方もいらっしゃいます。先日催した開館一周年の記念イベントには、大変多くの地元の方々が参加してくださり、たった一年でこんなに地域に愛される施設になるとは予想外でした。

一年間での来館者数は開館当初に目標としていた倍の3万人を超え、その多くを占めるのが地元の方々です。小学生

入館料がいらぬフリーゾーンには
コンビニ本を配架貴重なマンガ雑誌や資本マンガは
ガラスケース内に展示

思い思いの姿勢でマンガに没頭

を筆頭に様々な年代の方に利用されています。地元小学校の社会科見学や、中学校の職場体験学習、長期休暇に実施される先生方の研修も積極的に受け入れています。ただ「マンガが読める場所」というだけではなく、公的施設を利用する訓練や社会経験を提供する場としても地域に貢献したいと考えているからです。

合志市には書店が一軒もないので、書籍文化が発達している土地とは言えません。しかし、だからこそマンガミュージアムの存在価値があると思っています。当館では隣に建つ合志市西合志図書館と合同イベントを企画するなど、協力・連携しながら活動しています。児童書は図書館で、マンガはマンガミュージアムで、といったように、図書館とマンガミュージアムを行ったり来たりする親子連れも見かけます。両館の存在が、この地域の書籍文化の芽生えに寄与できているのであれば嬉しいですね。



お気に入りの場所でマンガを楽しむ

ーミュージアムが様々な角度で地元の方々の暮らしに根付いている様子が伺えます。これから地域の活性化が期待できそうですね。

そうですね。ですが、ミュージアムという「ハコ」を作っただけでは、本当の意味での地域活性化は期待できません。施設から地域が持つ価値を発信して、まずは住民が地域の魅力に気づき、その地域への矜持、つまり「プライド」を持つことが重要なのです。

そのために有効だと考えているのが、マンガを「作る」ことです。地域に眠っている偉人や受け継がれている文化をストーリー化して、地域を紹介する「ご当地マンガ」を制作するのです。私が代表を務めるNPO法人熊本マンガミュージアムプロジェクトなども協力しながら、すでに数冊を刊行し、現在熊本の地元紙にも連載中です。

先日刊行した熊本県天草地方を舞台にしたマンガは、天草市から相談が寄せられたことをきっかけに制作がスタートしました。出来上がったのは石工の物語です。世界文化遺産に認定された大浦天主堂をはじめとする長崎県の歴史的建造物に、彼らの技術が発揮されていることをストーリーにしました。そのように誇らしい歴史があるにもかかわらず、地元の方ですらマンガを読んで初めて知った方もいらっ

しゃったようです。

合志市にも明治期から終戦後しばらくまで続いた合志義塾という私塾がありました。独特の教育方針で全国的に有名な学校でしたが、今では知っている人も少なくなっています。そこで『カタルバの樹ー合志義塾ものがたり』という学習マンガを作りました。画力、ストーリーのクオリティーの高さが評価されて熊本日日新聞社の出版文化賞を受賞したこともあります。

「うちのまちには何もない」なんて言う方もいますが、本当は知らないだけで、各地域にはマンガにできるくらい素晴らしいエピソードやキーパーソン^{キーパーソン}の足跡が眠っているはずなんです。地域密着型のマンガミュージアムとして、集めたマンガを並べるだけではなくて、地域を巻き込んだ企画を打ち出すことも重要なミッションだと考えています。

熊本ゆかりのマンガ家コーナー
熊本県は人口に占めるマンガ家・評論家・研究者が多い

1960年代から2010年代まで10年刻みで配架

橋本館長にバックヤードを案内していただく
コンテナの中身は全てマンガ

ー第3のミュージアムである合志マンガミュージアムには、アーカイブ機能も備わっているのですよね。

マンガミュージアムの館長という立場以前に、一人のコレクターとして、そしてマンガを愛する者として、今まで日本で刊行された膨大な量のマンガがきちんとアーカイブされていない現実を危惧しています。同時に、出版業界の低迷によってマンガそのものが無くなっていくのではないかと危機感を募らせています。

実際、管理する場所と人手の不足を理由に、他のマンガミュージアムや図書館などから当館宛てに続々とマンガが送られてきています。当館がオープンする以前から私が個人的に集めていたコレクションや知人から受け継いだものと合わせると10万冊以上になると思いますが、冊数が多すぎて途中で数えるのをやめてしまったほどです。

私はそれらのマンガコレクションは、次の世代に渡すために一時的に「預かっているもの」だと思っているんですよ。とにかく現物を残して、選別や評価は次世代に託すつもりです。そのためにも当館のようにアーカイブ機能を持った施設が欠かせませんが、どんどん増えていく蔵書の管理を小さな



合志マンガミュージアム

所在地 熊本県合志市御代志1661-271
TEL 096-273-6766
開館時間 10:00~18:00
休館日 月曜日(祝日の場合は翌平日)、
毎月末日(土・日・祝を除く)、年末年始
※展示替えによる臨時休館あり
URL <http://koshi-mm.com/>

当館だけで行うのは限界があります。ですから、他のマンガミュージアムや自治体などとネットワークを作って協力し合う必要があるんですね。最終的には国レベルでマンガをアーカイブする必要があると思っています。

現物を保存するには土地が必要ですから、いっそのこと当館のある合志市を中心に、熊本県を全国のマンガの収蔵拠点にできないかと構想しています。これは大都市ではなく、合志市のように土地にゆとりのある地域にしか果たせない役割です。

そのように大きな夢を描きながら、この合志マンガミュージアムをマンガが大好きな人たちが集まる「聖地」にしたいと考えています。同時に、地元の人たちに愛され続ける施設であることも目標です。

マンガを使った町おこしに関心のある自治体からの問合せも、県内外問わず増えています。当館が所蔵するマンガは寄贈されたものがベースですし、施設も使われなくなった旧郷土資料館をリノベーションしたものです。開館のための大規模な予算が必要ないので、小さな自治体に適したモデルケースとして注目を集めているのでしょう。

海外では日本のマンガが学術的研究対象としても高く評価されていますが、日本でもようやくその価値が見直されてきました。未来へ残すべき「文化財」としてマンガの地位が向上すれば、自分の住む地域にマンガミュージアムがあることが住民にとって誇りになります。これからもマンガを使った町おこしはますます発展していくことでしょ。うして生まれた自負心が地域を活性化させる原動力になるのではないかと思います。

ー地域密着型マンガミュージアムのパイオニアである合志マンガミュージアム様のこれからの動きにますます注目が集まりそうですね。本日はありがとうございました。

(取材日:2018年7月26日)

07



記録と記憶の交差点

～市民に寄り添うアーカイブズ～

interview

大仙市アーカイブズ

話し手

高橋 一倫 さん

大仙市役所 総務部総務課アーカイブズ
大仙市アーカイブズ 主席主査
(教育委員会文化財保護課併任)

聞き手

矢賀部 仁

金剛株式会社 復興推進本部 戦略室

※所属・役職は取材当時のものです



大仙市アーカイブズ(上:空撮 下:外観)
裏の沼で助けられた白鳥が翼を広げて飛び立っていく姿がイメージされている



古文書ボランティアの様子

上空から見ると白鳥が翼を広げた形をしているこの建物は、閉校になった旧双葉小学校の校舎を活用したものです。昔、ここの生徒が裏の沼でケガをしていた白鳥を助けてあげた…、そんなエピソードがこの建物には込められています。

そう語ってくださったのは、大仙市総務課の高橋さん。大仙市の前身自治体の一つである旧太田町時代から町史編さんに携わってこられたそうです。

施設のいたる所に旧双葉小学校時代の面影を残す大仙市アーカイブズは、平成29年5月に旧太田町史編さん事業にかかわってきた市民の声を受けオープンしました。開設準備から現在までの経緯について、そして東北の市町村で初めての公文書館となるこの施設の役割と市民から寄せられる期待について高橋さんにお話を伺いました。

一大仙市アーカイブズ設置のきっかけを教えてください。

ここ大仙市は平成17年3月に8市町村が合併してできた市です。大仙市アーカイブズ誕生の源流は、合併前の構成自治体の一つである旧太田町が平成14年からはじめた町史編さん事業にさかのぼります。

当時、旧太田町には編さんされた自治体史が無かったため、合併を前にボランティアの皆さんとともに、町史編さんに取り組むことになりました。

ところが編さん事業に着手してほ

どなく、特に近代以降の資料が役所に残っていないということに気が付きました。昭和の大合併、高度経済成長の時期の行政文書が極端に少ないのです。合併の混乱や、道路や橋の整備といった経済活動優先で、公文書管理に手が回らなかったという事情があったのでしょうか。

その一方で、地域に古くからある家々には実に多くの地域史料が残っていました。日本に町村制が敷かれたのは明治22年で、それ以前に地域の行政事務を預かっていたのは域内に点在する戸長の家々で

した。古くからの地域の歴史を紐解こうとした場合、公文書だけでは限界があり、民間に残るこうした地域史料が重要な役割を果たします。

これら一連の経験を通じて、ボランティアの皆さんと職員が、地域の記憶と記録を守り伝えることの重要性を共有するようになりました。

公文書・地域史料整理の直接的な契機となったのは、町史編さんに関わった市民の方から平成19年に寄せられた市長あての提言でした。これを機にアーカイブズ建設に向けた検討に発展し、およそ10年の歳月を経て、平成29年に大仙市アーカイブズが開設されるに至りました。

一まさに市民の声でできたアーカイブズですね。開設準備を進める中でも、市民の皆さんが大きな役割を果たしてくださったそうですが。

市民の皆さんは大仙市アーカイブズ設立にとって一番の援護射撃でした。

平成19年から始まった地域史料の整理ボランティアには多くの市民の皆さんが力を貸してくださいました。地域史料の多くはいわゆる古文



展示室では解読された古文書をもとにした企画展示などが開催されている



平成28年職員研修兼シンポジウム

書で、これを解読し整理するには古文書解読ボランティアの皆さんのお力は必要不可欠です。活動を通じて、ボランティアの皆さんの中でも資料を残すことの重要性に対する認識が深まってきました。そうしてボランティアの皆さんが、自らその認識を周囲に発信していただいたことで、アーカイブズの開設を待望する声が市民の中に少しずつ広がっていきました。こうした行政外部からの期待の声はアーカイブズ設置に向けての大きな推進力になり、市民と行政とのいい循環になりました。

開館後に実施した数々の展示企画も、古文書解読の成果の賜物です。現在も市内各所でボランティアの方々のお力添えを得ながら古文書の解読と目録作成の整理を続けています。

一開設に向け、様々な研修やシンポジウムも開催されたとか。

アーカイブズ設立に向けたさらなる機運の醸成のため、平成26年から市民や関係団体を対象としたシンポジウムを開催しました。一番大きかったのは平成28年に開催した市の職員向けの研修会を兼ねた全4回のシンポジウムです。対象としたのは職員の中でも40代未満の若手。これからの市の中核となる若手の職員こそが、公文書に対する正しい理解を持

つ必要があると考え、敢えて若手中心の研修としました。

一様々な経緯を経て平成29年5月の開館に至ったわけですが、開館後の取り組みについても教えていただけますか？

開館行事が一段落すると、いよいよ資料の搬入作業が始まりました。

当初は資料の搬入・整理と合わせて、運営のための諸制度の整備が事業の中心に据えられていました。災害対応のための制度整備もその一つだったのですが、資料の搬入作業が始まって間もない7月22日～23日、この一帯は集中豪雨の被害に見舞われました。当館は無事でしたが、豪雨災害から3日後、ここから山を挟んで反対側にある淀川保育園の資料が被災したという一報が飛び込んできました。園児たちの成長記録やアルバムが先の豪雨災害により水損したというのです。急きょ我々は現地に赴いて被災資料約30箱を持ち帰り、乾燥、クリーニングといった資料保全の処置にあたりました。幸い当館には東日本大震災の津波による水損資料をレスキューした経験のある職員がいましたし、私自身も開館前の2月に釜石で被災資料のクリーニング作業を経験してきたばかりでした。

災害対応の準備が制度として整っていたわけではあ



旧太田町史編さん事業から使われているドキュメントスキャナー



水損被災文書を淀川保育園から搬出する様子



ドライクリーニング作業



扇風機で乾燥

りませんでした。このように既に備わっていたノウハウを活かしたことでアーカイブズの社会的な役割を果たすことができたと思っております。

また、当館へのレスキューの要請をくださったのは、先述の研修会に参加した子ども支援課の職員でした。研修会を通じて他部署の職員が、アーカイブズが資料レスキューの役割を担っていることを理解してくれていたわけです。お陰で我々も、資料レスキュー活動に力を発揮することができました。

一過去の地域史料同様、現代の地域史料を後世に引き継ぐというのもアーカイブズの重要な役割というわけですね。

大仙市アーカイブズには、ふるさとの記憶と記録を守り活かすセーフティーネットとしての役割があります。公文書であろうと地域史料であろうと、当館では、大仙市に生きた人々の営みを記録するものであれば選り好みすることなく全てを取り扱いの対象としています。資料の形態も紙のものだけでなく、写真、映像、音声と多岐にわたります。



貴重資料を保管する収蔵庫

開館から一年、市民からの問い合わせは着実に増えてきました。ご自身の先祖にまつわる情報を求めて市外から問い合わせに来る方もいらっしゃいます。ゆくゆくは図書館や文化財保護課との連携もはかり、それぞれが受けた問い合わせを一元的に管理し共同利用できるようなデータベースなども構築するなど、なお一層の利便性の向上を図っていきたく考えています。

一人は自らが関わった地域の記憶とも存在します。将来、大仙市アーカイブズのような取り組みが全国の自治体にも広がっていけば、地域と人との関わり合いももっと強くなっていくのではないかと思います。本日は貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。

(取材日：2018年6月15日)

大仙市アーカイブズ

所在地 秋田県大仙市強首上野台1-2
TEL 0187-77-2004
開館時間 午前9時～午後5時
(資料請求は、午後4時半まで)
休館日 日曜日、月曜日及び国民の祝日、
年末年始(12月29日～1月3日)、
特別整理期間



矢部川流域 古代からのメッセージ



interview

筑後広域公園芸術文化交流施設 九州芸文館

話し手

津留 誠一 さん(中)
九州芸文館 館長
NPO法人芸術の森デザイン会議 代表

安西 司 さん(右)
九州芸文館 交流事業担当
NPO法人芸術の森デザイン会議

武下 紀夫 さん(左)
福岡県 人づくり 県民生活部文化振興課
事務主査

聞き手

矢賀部 仁
金剛株式会社 復興推進本部 戦略室

※所属・役職は取材当時のものです

福岡県南部を東西に流れる清流・矢部川。豊かな自然に恵まれるその流域には、太古の昔から蓄積された固有の風土や文化が、人々の永年の営みとともに息づいています。この一帯を形成する5市2町は「筑後七国」と総称され、昨今では境域を越えた様々な文化交流が展開されています。その中心的役割を担っているのが、芸術文化交流施設「九州芸文館」。広大な筑後地域を俯瞰する文化交流の取り組みにより、筑後地域の新たな歴史の扉が開かれようとしています。

—まず、九州芸文館の施設の概要について教えてください。

九州芸文館は、平成25年に福岡県の施設として開館しました。デザイン協力は世界的建築家の隈研吾さんです。建物の背後に広がる風景に溶け込むよう、低層で山並みをイメージした作りになっています。

各種スポーツ施設や公園を擁するこの一帯は「県営筑後広域公園」として整備されたエリアで、当館の目の前には九州新幹線の筑後船小屋駅があります。九州自動車道も近くに整備されており、交流施設としては恰好の立地にあります。

当館では「芸術文化」「体験」「交流」という三つを活動の柱に掲げており、施設の設置者である福岡県と指定管理者の「ちくご」R芸術の郷事業団が、年間を通して様々なイベントを企画・運営しています。



九州芸文館と九州新幹線・筑後船小屋駅

—指定管理者「ちくごJR芸術の郷事業団」の構成機関の一つ、NPO法人芸術の森デザイン会議(以下、デザイン会議)は、彫刻家でもいらっしゃる津留館長が立ち上げた機関だそうですね。九州芸文館が開館する以前からこの地域の町おこしに関わっていらっしゃったということですが。

デザイン会議は、この矢部川流域の文化や風土をデザインの力で発信していくための様々な活動を行っている団体です。たとえば「筑後七国」を構成する5市2町の特徴をわかりやすく伝えられるよう、それぞれにキャッチコピーを付けました。日本一の家具生産量を誇る大川市は「匠のくに」。川下りが有名な柳川市は「水のくに」。信長が舞った「敦盛」で有名な日本最古の舞楽・

こうわかまい
幸若舞が伝わるみやま市は「幸のくに」。果物の栽培がさかんな広川町は「果のくに」。全国ブランドの八女茶の名産地八女市は「茶のくに」。いくさや米、キノコなどの栽培が盛んな大木町は「穀のくに」…といった具合です。ここ筑後市は、パレン^{こいのき}タイン神社の愛称で有名な恋木神社になぞらえて「恋のくに」としました。こうして矢部川流域を一体として捉えると、実に豊かな自然と風土に恵まれた地域であることがわかります。地元の方々は「うちのまちには何にも無い」とよくおっしゃいますが、決してそんなことはないんです。現在の自治体の単位ではなく、古代にこの地を治めていたと言われる卑弥呼の視座で広く地域を捉えなおすことが重要です。

—確かに、古代から続く人々の営みという切り口で矢部川流域を一体として捉えるのは理に適っていますね。

この地域は、多くの芸術文化を育んできた土地でもあります。絵画では青木繁や坂本繁二郎。文学では北原白秋や檀一雄。現役で活躍されている五木寛之さんや安部龍太郎さんといった



「筑後七国」を構成する5市2町
出典:「筑後七国よかとこ巡り旅」<https://chikugo7koku.net/>

芥川賞、直木賞作家もこの地域の出身です。伝統工芸では大川の家具や久留米^{がすり}餅など…。数え始めると枚挙に暇がありません。

約400年前、江戸時代の芸術家・^{ほんあみこうえつ}本阿弥光悦が京都・鷹峯に開いた「芸術村」は、多くの芸術家の創作と生活の場として栄えました。デザイン会議は、この筑後地域に現代の芸術村を再現すべく、20年にわたり「芸術の里構想」を推進してきました。芸術家たちが制作し、発表し、そして生活する場をこの筑後に作ろうという構想です。デザイン会議のメンバーには芸術分野の方々ばかりでなく、医者や会計士などもいらっしゃいます。芸術の力で町おこしをしたいという方ならどなたでも歓迎しています。

一なるほど。かねてからのそうした理念と活動が、九州芸文館の運営に活かされているわけですね。

平成25年にこの九州芸文館が完成し、指定管理者が公募された折には、何としてもという思いで応募しました。大手出版社など並み居る方々の応募がありましたが、なんとか受託することができました。施設を運営するにあたり、会計管理、施設管理などのノウハウも不可欠でしたので、JR九州エージェンシー(株)に代表団体になっていただき、JR九州メンテナンス(株)(現:(株)JR九州サービスサポート)とともに三者で事業団を組成し運営にあたっています。

一九州芸文館が担う三つの活動の柱は「芸術文化」「体験」「交流」とのことですが、それぞれについて教えてください。まず「芸術文化」について、具体的にはどのような取り組みをされているのでしょうか？

芸術文化事業は、美術展覧会や「アーティスト・イン・レジデンス」が該当します。

美術展覧会は、県主催を年3本、指定管理者主催を年2本以上、合計5本以上をコンスタントに開催し、県立美術館コレクション展や、筑後地域にゆかりの作家の作品などを紹介しています。

「アーティスト・イン・レジデンス」は平成27年から始めたプログラムです。国内外のアーティストに筑後市内に滞在していただきながら、筑後地域をテーマにした作品を制作し、この九州芸文館で発表してもらうというもので



アーティスト・イン・レジデンス「MEIJIKAN」での懇親パーティーの様子



アーティスト・イン・レジデンス2015年作品「結ばれる飛白の情景-indigo scenery」武内貴子(福岡)



美術展覧会の様子

す。平成27、28年度は^{ちくれんてい}「筑恋邸」という筑後市の居住体験施設を滞在拠点として、地域の方の協力を得ながら実施し、また、平成29年度は、筑後船小屋駅隣の羽犬塚駅前にある「MEIJIKAN」を滞在拠点として実施いたしました。特に、「MEIJIKAN」は、100年以上の歴史をもつ宿泊施設「明治館」が、平成28年度に「羽犬塚プロジェクト」という企画によりアート作品に囲まれながら宿泊できる場所へと生まれ変わった複合施設であり、アートにご理解の深いオーナーさんとのご縁により、事業の新たな拠点としてご協力いただいております。

一まさに地域の方のご協力によって成り立っている事業ですね。二つ目の柱「体験」についてはいかがでしょうか？

体験事業には、様々な講座やワークショップがあります。夏休みと冬



子どもアカデミー講座

休みに開催している「子どもアカデミー講座」は特に人気があり、毎年、受付の当日は朝から電話が鳴りっぱなしです。講座の内容は美術や音楽といった芸術科目を子どもたちと一緒に体験するというものです。芸術科目は、普遍的な価値観や生きる力を身につけるために不可欠ですが、学校教育の現場では十分な時間を確保できていないのが現状です。理屈で理解するのではなく、しっかり時間をかけ、体験を通じて「楽しい」とか「難しい」とか、そういった感覚を身につけることが重要です。この九州芸文館には、地域の社会教育施設としてそうした体験の機会を提供する責務があると考え取り組んでいます。

一アート教育に対する親御さんたちの期待の高さが窺えますね。三つ目の柱「交流」。これはどういったものですか？

交流の代表的な事業は「卑弥呼の火祭り」です。これは、この筑後地域に残る伝統行事や食文化・地酒を九州芸文館に集めたイベントで、年々来場者も増えてきています。

各地域に伝わる祭りの中には、後継者がいない、人が来ないという問

題を抱え、伝承の危機にあえいでいるものが少なからずあります。各地の祭りを盛り上げるためにご協力をお願いすると、「祭りは神事であってショーではない」「本祭でも人がいないのに、外部に持ち出す余裕などない」という反応を示されることが殆どでした。

我々の趣旨に賛同していただける方もいらっしゃるのですが、目の前で賛成派と反対派の喧嘩が始まったりするんです。そんなことを繰り返しながら何度も足を運び、ようやくご協力いただけるようになるまでに、だいたい3年はかかります。中には、地元の氏子衆の長老格の方々の反対を覚悟して出してくださる方もいらっしゃいます。あとになってそんなお話を聞かせていただいたときには、思わず涙がこぼれました。

かつて子どもたちは、地元の祭りで花形を務める近所のお兄ちゃんの勇壮な姿に憧れながら、その地域へのアイデンティティを育てていったものです。「卑弥呼の火祭り」に参加することで後継者の発掘に繋がったというお話を聞かれています。神事である地域の祭りを外に出すということは、それなりの苦勞と覚悟が伴うものですが、それを乗り越えてご協力くださるのは本当にありがたい限りです。

一九州芸文館を「美術館」でも「博物館」でもなく「芸術文化交流施設」とされている意味がよくわかりました。この筑後地域全域を舞台に地域の発展に貢献する数々の活動、これからの展開がますます楽しみです。最後に今後の展望をお聞かせいただけますか。

九州芸文館は今年で6年目を迎えました。身近な文化・芸術に触れていただくことで、郷土の誇りに気づいていただき、地域の発展に繋がっていく。世代を越えてそんな循環が生まれるきっかけを今後も作っていきたいと考えています。

一本日は貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます。(取材日:2018年8月21日)



卑弥呼の火祭り(筑後市熊野神社「鬼の修正会」)

筑後広域公園芸術文化交流施設・九州芸文館

取材地 福岡県筑後市大字津島1131
TEL 0942-52-6435
開館時間 午前9時から午後9時まで
休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月29日~1月3日まで)
URL <http://www.kyushu-geibun.jp>





伊藤 香織

写真/鈴木 陽介

09

地域と市民をつなぐ「接点」

「シビックプライドを育む文化施設」

話し手

伊藤 香織 さん

東京理科大学 理工学部 建築学科 教授

東京理科大学理工学部建築学科教授。シビックプライド研究会代表、東京ピクニッククラブ共同主宰。専門は都市空間のデザインと解析。主な著書に『シビックプライド2【国内編】：都市と市民の関わりをデザインする』（宣伝会議 2015）、「まち建築：まちを生かす36のモノづくりコトづくり」（彰国社 2014）、「シビックプライド：都市のコミュニケーションをデザインする」（宣伝会議 2008）など。

聞き手

宮脇 薫子

金剛株式会社 復興推進本部 戦略室

※所属・役職は取材当時のものです

近年、図書館や博物館、公文書館などの文化施設がまちづくりの拠点として期待される役割が大きくなる中、多くの自治体やまちづくりの現場で

「シビックプライド」という言葉に注目が集まっています。

「都市に対する市民の誇り」を意味するシビックプライド(civic pride)は、いわゆる郷土愛やお国自慢のような地域に対する愛着にとどまらず

「当事者意識にもとづく自負心」であると、

シビックプライドを研究されている東京理科大学の伊藤香織教授は語ります。

そして伊藤教授によると、本誌で取り上げているような文化施設は、地域と市民をつなぐ「接点」としてシビックプライドを醸成するための大きな可能性を秘めているのだそうです。

▶ はじめに、シビックプライドの歴史について教えてください。

「シビックプライド」という考え方が広く認識され始めるようになったのは19世紀のイギリスです。当時のイギリスは、商工業が発達して近代都市が誕生し、地域の主役が王侯貴族や教会から産業の発展によって富を得た「市民」へと移り変わっていく時代でした。

市民たちは進歩的な考え方を背景に、新しい都市づくりを支えていくこととなります。それが自分たちのミッションであり美徳だと考えていたのです。具体的には、役所、図書館、音楽ホール、公園、広場といった公共施設から鉄道や下水道といったインフラ設備に至るまで「市民のための施設」が市民の働きかけや寄付で建造されるようになります。こうして、自分たちが文化を勝ち取り、誇りをもってまちを作りあげている自負心が育っていったのです。

その中でも特に、公共建築物はシビックプライドを具現化したもの

と考えられていました。多くの人の目に触れる建築物は「誇れるもの」として共有しやすかったためです。現在でも、イギリスの各地で見事な装飾が施された公共建築物を目にすることができます。

当時のイギリスにおける「市民」というのは強い経済力をもつ中産階級のことです。現在私たちが一般的にイメージする「市民」に比べてかなり限定された人々を指します。彼らはお金を持っていることそのものではなく、それを文化に投資していることが誇りでした。それは文化を理解している誇り、自分たちが知性を持って生きていくのだという誇りだったのだと思います。ですから、そういう意味でシビックプライドと文化施設の関係は強かったと言えます。

▶ 言葉通り「プライド」をかけた市民たちの行動がシビックプライドの源泉だったのです。

近年、日本でも「シビックプライド」という言葉を目にする機会が多くなってきました。



「シビックプライドを象徴する」と形容されるリーズのタウンホールは、1858年に建設された

これはシビックプライドの概念が日本で急に立ち上がったということではなく、以前から地域への誇りを感じていたり、その気持ちを元にアクションを起こしていた方も沢山いたけれども、それを一言で表す言葉がなかったということだと思います。言語化されたことで「そう言い表せばよかったんだ」と思った方々が、シビックプライドという言葉を使われているのではないのでしょうか。現在の日本における「シビックプライド」は、地域への誇りに加えて、愛着や郷土愛のような広い意味を包括しています。地方自治体が地域の活性化やシティプロモーションに取り組む際にもよく使われているようですね。

▶ 前述の通り、元々シビックプライドという考え方は地域に対する気持ちを行動に表す中で育まれてきました。ですが多くの方にとって、実際に行動を起こすことそのものの敷居が高いような気がします。

そうですね。例えば、まちづくり活動に熱心に取り組む方がいる一方で、地域のためにアクションを起こすことに対するハードルの高さを感じている方もいらっしゃるでしょう。またはそれ以前にほとんどの方が「自分も何かができる存在である」と思っていないのではないのでしょうか。自分が行動を起こしても何も変わらないと思っている方や、そもそもそんなことは考えたこともないという方が大多数かもしれません。最初から「このまちを良くしたい！」などと大きな目標を掲げなくても良いので、まずは「自分の好きなことをやってみよう！」くらいの、いい意味でゆるい気持ちで始めてみてほしいと思います。

ただ多くの方は、好きなことをするという、美味しいものを食べるとか綺麗な洋服を買うといったように、ただの「消費」になってしまうことが多いのです。ですが人間は、単に自分のためだけに消費する喜びよりも、誰かの役に立って感謝されたり、自分の起こしたアクションで何かが変わった実感を得た時の方が嬉しいと感じるのではないのでしょうか？仕事や家族内での役割分担で例えると分かりやすいと思いますが、自分がいるからこのプロジェクトが成り立っている…みんなで家事を役割分担できているから毎日快適に過ごせている…そのような、コミュニティのために自分の持つ力を発揮しているという自負心。言い換えれば、自分に対する存在価値や誇りを感じられれば人は生きていけますし、それが「生きがい」に繋がってくるのだと思います。

まちに対する誇りや自負心、愛着といったシビックプライドは一人一人の心の中にある気持ちですので、本人以外の誰かが形作ることではできません。しかし主観的な感情ではなく、シビックプライドを醸成する「接点」であれば作ることができます。例を挙げると、かつてのイギリスにおける壮麗な公共建築物をはじめ、伝統的なお祭りやまちを使ったイベント、まちのメッセージを伝えるシンボルマークなどです。特に、公共施設には人々が集まることが出来る空間があるので接点として機能しやすいといえます。

▶ そのようなハード面の特徴として、建築物という空間が挙げられるということです。

一方、公共施設のソフト面に目を向けると、大きく分けて「きっかけづくり」



ル・アーブルでのロワイヤル・ド・リュクス公演
誰もが楽しめるパフォーマンス・アーツは、まちの物語になる

と「担い手づくり」を通して接点としての力を発揮できると考えています。

大前提として、アーカイブ機能を持つ図書館や博物館、公文書館というのは「知」を蓄積している場所です。元来これらの文化施設は、知の提供を通じて多くの気づきやアイデアといった「きっかけ」を与えてくれる機能を有しています。

最近では、ワークショップなどのイベントを開催する施設や現代アートを中心とする「参加型アート」の展示、色々な都市で開催されるアートフェスティバルなどの芸術祭が増えました。このような活動にゲストとして参加すれば何らかの「きっかけ」を得られますし、運営ボランティアとして参加すればイベント運営のノウハウに触れることもできます。ですから、このような体験できるイベントはシビックプライドを醸成するきっかけづくりの機会でもあり、同時に「担い手づくり」の場でもあると言えます。

「担い手づくり」には、活動を中心になって牽引していけるような「コアになる方々の育成」と、その活動に参加して「活動を支える方々を増やす」の二種類があります。トップダウン的な進め方でなくステークホル

ダーみんなで活動を続けていくためには、サービスを提供する側・受ける側を越えたコミュニティを持続しなければなりません。そのためには、この両方の担い手が不可欠です。

シビックプライドを持つ「市民」は、その地域に住民票があって税金を納めている方や、そこで生まれ育った出身者だけに限定する必要はありません。観光客として何度もそのまちを訪れるような「ファン」など、様々な立場の方々がまちを取り巻いているはずで、このような方々も「市民」として、そして「担い手」としてその地域に対するシビックプライドを持てると思います。

何か行動を起こすためには「自分でもできるんじゃないか?」と思えることがとても大事なこと、そう思えなければきっと何も始められません。文化施設は、空間、知識、体験を通して、シビックプライドを胸に秘めている市民の背中を押してくれる存在になり得るのではないのでしょうか。

▶ 加えて、文化施設はコレクションしているモノとの出会いを提供する場所でもありますよね。

技術が進歩して様々なものをパナチアルに見られるようになったとしても、本物に対峙した時の感動は絶対になくならないでしょう。ただ、お



ミラノのガレリア中心に展示された都市模型は、ミラノ都市センターの出張展示

城のように風景の一部として多くの人に共有される建築物と異なり、館の中にあるモノは施設に足を運んだ方しか見られません。ですから、文化施設に足を運んでもらう工夫が必要ですよ。

そのためには文化施設がふらっと気軽に立ち寄れる場所であることが重要です。確固たる目的がなくても、なんとなく立ち寄って館内で時間を過ごす中で、文化施設の持っているモノ、そしてそれを通して更なる何かに「出会える場所」であって欲しいと思います。例えば図書館によく見られる司書の方が工夫を凝らした特設コーナーなどは、そこを通る方々に本との「予期せぬ出会い」を提供しているとても良い例だと感じています。そのような思いもよらなかった偶然の出会いがあることが、文化施設に足を運ぶ醍醐味なのだと思います。

▶ インターネットで検索すればあらゆることをすぐに調べられますし、家に居ながらにして買い物もできる時代になってきました。文化施設に限らず、実際に外出してどこかへ足を運ぶ機会自体が少なくなっている気がします。

確かに、知りたい対象や手に入れた目的のものが明確に分かっていれば、家から出なくても済む時代になっていますが、だからこそ、たまたまその場所を訪れたから出会えた人や体験できた出来事、手に入った知識がとても貴重になってきています。

最近、複合施設の中にある図書館や博物館、美術館が増えています

よね。図書館と美術館が一緒になっている施設もあります。そのように複合化する中で、文化施設は元々持っていた文化財のような「モノ」や、知識という「情報」を提供する場所に加えて、多様な人が交わり色々な「コト」が起こる場所になりつつあるのではないのでしょうか。

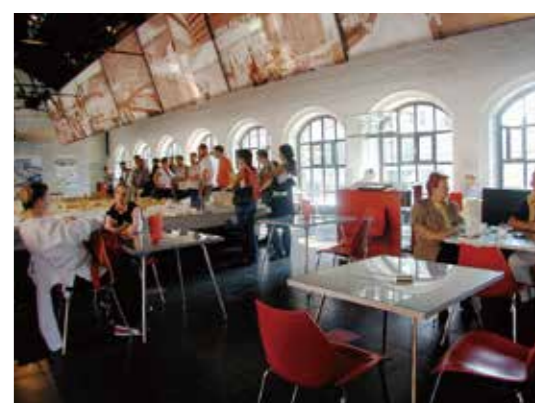
そうした、モノ・情報・コトといった自分の予期しないものとの出会いは、まちと出会い、関係を持つためのはじめの一歩と言えます。まちには年齢、性別、国籍などが異なる様々な人が同時にいます。もしかすると、文句ばかり言う人や自分と気の合わない人もいるかもしれません。ですが、そのような人も含めて「まち」なのですよ。思いもよらない多様な出会いを楽しめることと、まちに関わることは似ているような気がするのです。

「まち」と「私」に関係ができれば、まちが他人事から自分事に変化していくはずで、そのような地域に対する当事者意識の芽生えが、地域への誇りや愛着に繋がっていくのだと思います。

▶ 文化施設は地域と市民をつなぐ接点の一つであり、「思いがけない偶然の出会い」を創出する場としてシビックプライドの醸成に大きな意味を持っているのです。

本日は貴重なお話をありがとうございました。

(取材日：2018年6月19日)



ハンブルクのハーフェンシティ・インフォセンターでは、都市模型にカフェが併設され、多くの市民が散歩がてら立ち寄る



編集後記

今号のテーマは「まちをつなぐ、
ところをつくる」。

全体の記事を読み返して、一貫して
感じられたのが取材させていただ
いた皆様の「何かを守りたい」とい
う強い思いでした。その対象は様々で、
まちそのものや、地域のシンボリック
なもの、その場所ならではの文化、
そこで暮らす人々などです。

今号は企画の段階で「まちに対する
愛着や誇り」のようなものを表現
できる記事にしようという話があり
ました。当初は正直「自分自身がま
ちに対して愛着を持っているのかも
わからないのに大丈夫だろうか…」
という後ろめたさと不安がありました。
このような思いを抱えながら取
材を進める中で、目の当たりにした
のが「何かを守りたい」という皆
様の『PASSION』です。言葉にすると
大げさにも感じますが、「なくなっ
たら寂しい」「多くの人を知ってく
れたら嬉しい」というような、もっと
単純な思いから始まるものなのだ
と知ることができました。

わたしは熊本県内の小さなまち
で生まれ育ちました。ここには映画
館や流行りのカフェはありません。
観光地として有名なわけでもあり
ません。10代の頃のわたしは、自分
のまちを取り柄のない場所だと思っ
ていました。学校帰りにおしゃれなお
店に寄って帰る学生や、今どきのア
ミューズメントに溢れた都会がうら
やましかったのです。しかしそんな
思いとは裏腹に、夏休みになると冷
たい湧き水が溢れる池に毎日よう
に自転車を通ったことや、高校の冬
期講習の帰りに友達と商店街でた
いやきを買って食べたことは、わた

しの中であたたかい思い出として
残っています。今回の取材を通し
て、「思い出がつまったまちを守ら
ない」という思いと「愛着や誇り」が
わたしの中で結びつき、自分のまち
が好きだと胸を張って言えることに
気づきました。

本誌を手にとっていたいただいた皆
様はいかがでしょうか。すきな空間
や建物、景色はどこにありますか？も
ちろんそれは出身地や住んでいると
ころに関係なく「すき」と言ってい
いのです。「守りたい」と思ってい
いのです。本誌が、まちというあ
たたかいものを見つめ直すひとつ
のきっかけになればいいと思います。

今回貴重な時間を割いてお話を
聞かせていただき、度重なる校正
にも快く協力いただきました皆
様にこの場をお借りして厚く御礼
申し上げます。

今年本誌が40号目を迎えた上
に、弊社の新工場が落成した記念
すべき年でした。そこで、今号は
デザインを一新。新しいPASSION
として生まれ変わりました。

私事ではありますが、今回初
めて本誌の編集に関わり、無事に
発行まで終えることができました
ことを心より嬉しく思います。一連
の過程は決して容易いものでは
ありませんでしたが、たくさんの方
々と共に素敵な情報誌をつくり
あげることができたと思っています。

末筆ではありますが、本誌に
関わってくださった皆様に、改
めて心より感謝申し上げます。

2018年10月 社長室 三木